

國學院大學學術情報リポジトリ

国際研究フォーラム映画の中の宗教文化報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-12 キーワード (Ja): NDC8:371.6, 教育学. 教育思想, NDC8:161.3, 宗教学. 宗教思想 キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 科学研究費補助金・基盤研究 (A) 「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」・第2グループ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001574

セッション2

発題：中町信孝

「アラブ歴史映画に見るイスラーム
とナショナリズム」



レスポデント：臼杵陽

井上 それでは第2セッションに移らせていただきます。甲南大学の中町信孝先生です。よろしくお祈いします。

中町 ただいまご紹介にあずかりました中町信孝です。先ほどの近藤先生のご発表では総論的な、理論的な枠組みを論じて頂きましたが、私の方はもっぱら各論、アラブのマニアックな映画の紹介だけに専念するつもりです。

まず、私自身のスタンスを明らかにしておきますと、私はアラブ中世史、主にエジプトの歴史を専門にしております。また同時に現代アラブのポップカルチャーについても関心がありまして、ちょこちょこ調べております。他方、宗教としてイスラームを捉えることにはあまり慣れておりません。つまり、私は宗教学の専門家ではないということを申し上げておく必要があるでしょう。歴史学研究者であり、歴史の教員として働いていますので、その点では本日お集まりのみなさんとは、問題関心を異にする部分があるかも知れないと、あらかじめ弁解させていただきます。とはいえ、大学では主にアジア史、東洋史、時にはイスラーム史を担当することがあります。このような教科を担当する場合には、宗教の説明をすることは避けられませので、学生のまえではそれなりに「宗教としてのイスラーム」を論じていたりもします。

ところが、学生たちのイスラーム世界、アラブ世界に対する知識は非常に限られたものであるという点が、講義の場での実践的な困難となっています。高校での世界史の未履修問題というのが昨年問題になりましたけれども、学生たちにはそもそも世界史を習ってないという人が多いんですね。受けたとしても忘れてしまった、特に「イブン何とか」とかいうイスラームの人名、地名がまったく頭から抜けてしまっている学生が非常に多い。それに対して、9.11以降の国際情勢がそうさせるのかと思いますが、「イスラームのことを

知りたい」という学生たちの潜在的関心は反比例する形で高まっています。知識は不足している、しかし関心は高まっている。そのため、短期間でいろんな情報を身につけてもらうには、とにかく窓口としての映像利用、とりわけ映画を用いることを私の授業では行っています。

さて、このような目的から映画を教材にするときに、私は以下の3つのレベルが想定されると考えています。

1つ目は、やはり歴史の授業ですので、たとえば「1184年にサラディンがエルサレムを征服した」ということを教える時に、文字で黒板に書くよりは、映画を見せるほうが学生にも手っ取り早く「ああ、そうか」と思ってもらえる。非常に素朴な見せ方ではありますが、あたかも映画が歴史の再現映像であるかのように見てもらう、そして世界史の知識を増やしてもらう、そういう単純な方法です。しかしこれは当然ながら、危険な面もあります。映画にはしばしば誤った情報が含まれるものですが、その誤った情報を「史実である」とみなす人が出てくるからです。

とくに、監督者、製作者、脚本家、原作者の脚色という部分を、本当に起こったことであると学生が受け取ってしまうことも起こりえます。しかし見方を変えると、その脚色の部分こそが作り手からのメッセージであるというふうに教えることができます。これが2つ目の見せ方です。とはいえ、ここにもまた新たな危険が生じるでしょう。つまり、私の勝手な深読みを教えることで、学生たちの読みを恣意的に誘導していくということです。学生たちにしてみれば、監督は本当はそんなこと言っていないんじゃないか、先生の勝手な解釈なんじゃないか、という疑問を持ったとしても不思議ではないでしょう。

そこで、第3の見方のレベルを設ける必要がでてきます。つまり、解釈の仕方はいろいろあると。観客というのはそもそもいろいろな解釈をするものであって、監督が意識しなかったメッセージまでも観客が読み取っているかもしれない。あるいは監督と観客の間に言葉ではない共通の理解の土壌が成立しているので、全体としてこの映画はこういうふう需要されているはずである、というふうに説明することです。作り手、受け手の間に成り立つ解釈共同体を考えてもらう。これが3つ目のレベルです。

それでは、具体例として映画を見て頂きましょう。最初に取り上げるのは『キングダム・オブ・ヘブン』という、非常に有名なハリウッド映画です。日本でも大劇場で公開されていますし、それこそレンタルショップに行けばDVDが何本でも置いてあるという意味で、非常に使いやすい作品です。映画の内容についてはレジュメをご参照下さい。12世紀を舞台とした作品であり、「サラディンがエルサレム（エルサレム）を征服する」という史実を第一段階としておさえられると思います。この映画はオーランド・ブルームという人気

俳優を起用したり、大がかりなセットなど視覚効果を贅沢に使っているという点で、比較の見やすい映画です。さらに監督や脚本家はアラビア語の史料を参照していることが見て取れ、時代考証もしっかりしていると言えましょう。なにより本来敵役であるサラディンがとてもスマートに描かれているなど、ありがちな西洋中心主義的視点を是正するためには大きな貢献をなしてくれるでしょう。

それで、第2レベルの「メッセージ」というものについて考えますと、監督は世俗主義や宗教的寛容性というもの良きものとしてとらえ、それとは反対に「原理主義」ですとか、宗教的なもの、極端に言えば宗教そのものを「悪」としてとらえている、と思われる。たとえばこのシーンをご覧ください（映像）。これはクライマックス近くのシーンなんですが、オーランド・ブルーム扮する主人公バリアンが演説で兵士たちを鼓舞しています。ここで彼は、キリスト教、イスラーム、ユダヤ教の3つの宗教のうちで、どれがもっとも神聖であるかを問うことで、宗教的価値観の相対化を行っています。それに対してイェルサレムの司祭が「それは冒涇だ」という批判をしていました。結局この映画では、バリアンのような世俗的価値観をもった人を善玉として描き、それに対応するイスラーム側の善玉がサラディンということになります。もうひとつ、サラディンと主人公が和議を結ぶというラストシーンを見てもらいましょう（映像）。「（イェルサレムとは）無であり、すべてである」というサラディンのセリフから、彼がいかにも宗教的な価値観にとらわれない人物として造形されているかというのが見て取れることと思います。

それで、先ほどはこの映画が西洋中心主義を克服しうる映画であると言いましたが、世俗的価値観が宗教的な価値観に勝っているという主張をするだけでは、これは新しい形での二分法を再生産しているのに過ぎないのではないか、という感想を持つこともできるでしょう。この点に関して、次のシーンをご覧ください（映像）。ここではサラディン陣営にいるイスラーム聖職者が、サラディンに対して戦争遂行を強く進言しています。これは先ほどのシーンで少し登場したイェルサレムの司祭や、十字軍側の強硬派であるルノー・ド・シャティヨンという人物などと、ぴったりと対応しています。このように世俗と宗教の二分法というものが、この映画では徹底されています。この映画は確かに、アメリカや日本では興行的に成功したヒット作ではありますが、それはあくまで、世俗と宗教ならば前者の方が優越するという価値観を、送り手と共有している人々のみに受け入れられるべきものであって、もしその前提を受け入れないような人々、つまりは「あちら側の人たち」がこれを見たならば、一体どんな感想を持つのかなと想像しなくてはならないのでしょう。

そこでおあつらえ向きの映画があります。『サラディン』というエジプト映画で、1963年制作の古い映画です。ハリウッドではこの時期、『ベン・ハー』や『アラビアのロレン

ス』といった砂漠を題材にした歴史映画というのがたくさん作られていましたが、エジプトでもこのような歴史映画が撮られていたことになります。監督のユーセフ・シャヒーンという人物は去年亡くなりましたが、長年エジプト映画を牽引してきた巨匠です。そしてこの『サラディン』は芸術映画として評価が高い作品でして、大きな特徴としては、セリフがすべてフスハー（正則アラビア語）で語られています。他の大衆エジプト映画はアーンミーヤ（エジプト方言）を使うので、この映画のセリフ回しはそれだけで他の映画とは異なっているといえます。

さて、この映画が描いている史実は、ちょうど『キングダム・オブ・ヘブン』のその後の展開ということになるでしょう。イエルサレムを征服したサラディンが、その後にやって来たイギリス王リチャード獅子心王と争う、ということになります。しかし、ここにはこの映画が作られた時代の政治的背景が大きく刻印されていて、サラディンは劇中でしきりにアラブの団結を訴えています。そもそもこの映画の原語でのタイトルに「ナーセル（勝利）王」という言葉がついていて、これは当時のエジプトのナセル大統領を彷彿とさせる言葉であります。たとえばここで、サラディンが十字軍のフランス王フィリップの前に出て名乗りを挙げるシーンをごらんください（映像）。サラディンは敵陣にたった3騎で乗り込んで来ました。そして居並ぶ十字軍諸侯が長々と自己紹介をした後で、サラディンが実にシンプルに、「神の僕であり、アラブの守護者である」と名乗るわけです。この「アラブの番人」という言い回しが実は、アラブ民族主義の代表者であるナセル大統領を形容する称号となっているわけです。

このような民族主義的な部分には当時の時代的な要請が大きく反映されているわけですが、それに対して宗教対立の側面はどのように描かれているのでしょうか。十字軍と言えば通常、宗教戦争としてとらえられることが常ですが、意外なことにこの映画での十字軍戦争は、宗教対立としては描かれていない、少なくともサラディンにとっては宗教対立ではないんです。これはあくまでアラブ民族と征服者との戦いであって、ここにおいて宗教的なコンフリクトというのはすでに乗り越えられている、というふうに描かれているシーンがあるんですね。ここでご覧頂きたいのは、サラディンの部下イーサーが登場するシーンです（映像）。これは、サラディンの軍とリチャードの軍が最終決戦に今にも臨もうかというところなんです。サラディンが軍議をされていて、右端にイーサーがいます。イーサーはキリスト教徒アラブ人であるという設定です。キリスト教徒がサラディン軍の中核にいるということ自体が、サラディンがイスラームだけを代表する人物ではないんだという監督のメッセージを表しています。先ほど静寂のシーンでは鐘の音が聞こえましたが、つまり最終決戦の日がクリスマス・イブだという設定です。サラディンはクリスマスに戦争をすることをばばかって決戦を取りやめにし、自分はムスリムの兵士たちと共に礼拝に向か

おうとしていました。この後リチャードが遠くでこのミサとアザーン（イスラームの礼拝時刻を告げる言葉）を聞いて、心を動かされるというシーンも描かれています。今日的な目でみるならば、イスラームとキリスト教徒の対立は乗り越えがたいものという意識をわれわれは持ってしまうがちですが、この映画では、宗教的な対立はアラブ側ではすでに乗り越えられたものとして描かれています。これが40年前のエジプト映画では、普通に撮られていたわけですね。

もう一つ古いエジプト映画で、『おおイスラームよ』という作品を見てもらいましょう。制作年代は『サラディン』とほぼ同じですが、描かれている時代が100年ほどあとの時代、エジプトにまで攻めて来たモンゴル帝国軍をエジプトのマムルーク朝という王朝が追い返す、という映画です。この映画には原作がありまして、アラブでは有名な民間伝承が基になっています。また、劇中のセリフはすべてアーンミーヤ（エジプト方言）で語られていて、先ほどのサラディンとは趣きの異なる、大衆的な娯楽作品であるということも確認しておきたいと思います。

この映画における作り手のメッセージは、タイトルにそのまま現れています。「イスラームに救いを求める」という時にアラビア語では「ワー・イスラマー」という表現を使うのですが、そこから示唆されるように、この映画ではイスラーム主義的なメッセージが抽出できます。少しばかり、クライマックスの戦闘シーンをご覧ください（映像）。エジプト軍が敗れそうになっているところに、ヒロインが登場してアッラーの名が記された旗を振り始めます。「ジハードに赴け、神は偉大なり」と彼女が叫ぶと、皆が力を取り戻してモンゴル兵を撃退するというお話になっています。

しかし、このような神の力で敵を打ち破るというプロットだけを見れば単純なんですけど、時折、作り手が意識していない「エジプト・ナショナリズム」的なものが顔を出すところがあります。次のシーンは、モンゴルの使者がエジプトにやって来るところです（映像）。使者は、主のいないエジプトで一体私は誰に話せばいいのだとうそぶきます。そこで主人公が登場し、「私はエジプト市民である」と名乗って使者と対等に話すのです。そしてこの後、エジプトの民に推されて主人公は王位に就きます。このあたり、極めてエジプト的な、ローカルな刻印が押されているシーンと言えるのではないのでしょうか。宗教的な紐帯の以前に、エジプト属地主義的な愛国心が顔を出しているわけです。

以上、2つの古いエジプト映画をご覧いただきましたが、いずれの場合も、宗教的な問題は掲げられている。掲げられてはいるが、むしろ宗教対立は乗り越えうる、あるいはすでに乗り越えられた問題であるとされています。そして、より重要な問題として、汎アラブ主義であるとかエジプト・ナショナリズムが顔を覗かせているのです。

しかし、それならば、アラブではとっくに乗り越えられていたはずの宗教問題は、現在ではどうなっているのかをお話ししましょう。先ほどの『サラディン』を撮った巨匠シャヒーン監督が、今から10年前に撮った『炎のアンダルシア』という映画があります。この映画は日本でも公開され日本語版もあります。この映画でシャヒーンは、再び宗教に向かい合っているという面が見受けられるんですね。

この映画は哲学者イブン・ルシュドの半生を題材にした歴史映画で、時代的にはサラディンと同じくらいの時代の人です。しかし、史実という面ではほとんどでたらめに等しく、監督の自由自在な脚色が織り込まれています。ですので、この映画からはいかに監督のメッセージを読み取るかというのが大事な作業になっていきます。で、メッセージはどのようなものかと言えば、ずばり、「原理主義」に対する批判ということになるでしょう。劇中、「セクト」という教団が出てきます。そのセクトの犯罪をイブン・ルシュドが裁くんですが、その過程でセクトから脱退してきた若者が登場します。そこで彼が語る証言が、教団がいかにして若者を洗脳しているかということに尽きるわけです（映像）。ここで砂漠を歩かせるなどして若者たちの思考能力を奪い、終いにはアミールというセクトの代表に忠誠を誓って暗殺マシン、「自爆テロリスト」になってしまう、そんな描写がなされています。こういうシーンは一見すると、9.11事件の後でたとえばCNNなどが作ったドキュメンタリーフィルム、テロ実行犯の再現映像と非常によく似たプロットがあるようにも見えるのですが、驚くべきことにこれは9.11以前に作られていますので、さすが巨匠、時代の流れを予見していたかと驚くほかありません。

ところがこの映画は、カンヌで特別賞を受賞するなど、ヨーロッパでの評価は高いのですが、国内ではあまり人気はなかったようです。決して大衆的な人気を勝ち得ている映画ではないわけです。監督のメッセージというのはむしろヨーロッパ、欧米に向けたメッセージであって、国内の観客に共有されてはいなかった、と考えるべきでしょう。

最後にもう2本ご紹介します。最新の歴史映画をお見せできれば良かったのですが、近年のエジプト映画業界では歴史大作を作るほどの元気がないようです。そのかわり、現代もので見るべきものは多くありまして、この『ヤクービエン・ビルディング』はその代表です。これは、最近アカデミー賞を受賞した『クラッシュ』という映画がありましたが、その「エジプト版」というふうに言われています。様々な登場人物による群像劇なのですが、その中で1人、貧しい出自であるがゆえに差別されてしまう若者が登場します。ご覧下さい（映像）。警官への就職面接試験を受ける若者です。しかし若者は貧しい出自で、父の職業を口にした途端、面接場から追い払われてしまいます。この若者はこの後、次第

にイスラームに傾倒してしまうんですね。最初は個人的な恨みからその集団に入りますが、テロリスト・キャンプのようなところに連れて行かれる、そしてテロリストとして育っていくというのがこのシーンです。やはりこの手の教団のアジトは砂漠の中にあるんですが、この映画は9.11以降のもので、当然CNNやアルジャジーラ・チャンネルの映像を参考にしていると考えられます。

ここで指摘すべきは、このようなシーンと、先ほどの『炎のアンダルシア』との共通点、あるいは相違点です。セクトという原理主義組織をここでは戦闘集団として描いています。そしてドキュメンタリー・タッチでそれを描く手法。いずれにせよステレオタイプ的な原理主義組織という表象が現れています。宗教的な価値観を重んじる人々を、他者として切り離してしまうスタンスと言っても良いでしょう。しかしこの映画の場合には、そのスタート地点には貧困や出自による差別をうけた主人公への同情というまなざしも含まれています。この映画の中での、「イスラーム原理主義」に対するアンビバレントな感情は、『キングダム・オブ・ヘブン』とはやや異なる観客層が存在することをうかがわせています。

もう一つ紹介したいのは、歴史ものなのですが、実はテレビの連続ドラマです。2001年に放映された『サラディン』というシリーズがありました。サラディンの半生を扱ったドラマで、史実としてはイェルサレムの征服・解放でクライマックスとなります。このエンディングには非常に興味深いところがあります(映像)。先ほどの『キングダム・オブ・ヘブン』と同じ場面を描いているのですが、イェルサレムにもともと住んでいた人たちが、サラディンのおかげで故郷に帰ってきます。ある者は徒歩で、ある者は馬に乗り、老若男女が喜んで帰ってくるというシーンです。このシーンには、当然のことながら、パレスチナ難民の帰国という願いが込められています。ここで流れているこのドラマのテーマソングが、パレスチナの有名な民族詩人の詩を歌詞にした歌であることから、そのメッセージ性は明らかです。つまり、離散したパレスチナ難民たちをサラディンが戻してくれたというような描き方がなされているわけですね。

このテレビ版『サラディン』では、60年代の汎アラブ主義、反植民地主義というメッセージを今また繰り返してしまっていて、それが家庭で楽しまれる連続ドラマとして消費されたということは注目に値します。一方でこのドラマには、原理主義的な表象はまったく出てこないのです。先ほどの『ヤクービエン』とはまた違った形での、アラブ世界からのリアクションであるといえるでしょう。

最後に、今日ご紹介した映画は『キングダム・オブ・ヘブン』と『炎のアンダルシア』以外はいずれもローカル映画でして、映像を入手するにはインターネットの通販サイト、現地に赴いて路上で売られているコピー商品を買うなどの手段、ごくまれに東京国際映画

祭に来ることがあるかもしれませんが、入手するのが困難な作品ばかりです。しかし日本では手に入らないローカル映画の中まで探っていくと、監督と観客の共通認識、相互解釈共同体の姿というのが個別例として浮かび上がってくるのではないかと思い、あえて珍しい映画ばかり持ってまいりました。これで終わります。どうもありがとうございました。

井上 どうもありがとうございました。それでは引き続いて臼杵先生にコメントをお願いいたします。

臼杵 ただいまご紹介にあずかりました臼杵です。私の専門といいますのは中町さんと同じ中東研究でございますけれども、現代、とりわけパレスチナ、イスラエルの問題を研究しております。今日はコメントということで、私自身最近のイスラエルのことばかりやっておりますので、イスラエル映画と関連させて話ろうと思ったのですが、ただ今日の中町さんの議論は主にアラブ映画（『キングダム・オブ・ヘブン』はもちろんハリウッド映画ですけれども）を題材としてはあつかって議論しておりますので、アラブ映画の関係から私の見方なりをコメントとしてお話できればと思います。

まず最初に、今の報告のなかで紹介された2番と4番の作品の監督であるユーセフ・シヤヒーンという人について、補足的な情報をお話しておきたいと思います。巨匠であるというのはご紹介されたわけですが、実はこの人はユーセフという名前からはわかりませんが、キリスト教徒です。それは両親がレバノン出身ということでありまして、おそらくギリシャ正教徒だろうと思います。エジプトのキリスト教徒はコプト教徒が多いので、宗派関係からも監督自身の経歴は興味深い。この人の作品で私がかつてよく授業で使った映画に、1979年に製作された『アレキサンドリア・WHY?』という映画がございます。これは日本語の字幕の付いたビデオが販売されています。かつてはいろんなところで観ることができたのですがDVD化されていませんので最近はあまり見かけません。この作品を見ると中町さんの報告では『サラディン』や『炎のアンダルシア』の作品を汎アラブ的と表現しておりました。つまりアラブを統一するような議論でありますけど、この点を考えると大変興味深い題材であるということになります。

実は『アレキサンドリア・WHY?』という映画は、彼の自伝的な作品といわれています。実際に彼がアレキサンドリアのヴィクトリア・カレッジに入ったときには演劇少年で、彼自身、ハリウッドにあこがれる少年だった。彼自身、その後映画監督になったんですけれども、作品の時代背景は1942年です。42年というのは第二次世界大戦中でドイツ軍がリビアからエジプトに進軍している時期です。アレキサンドリアというのはまさに戦場になりかねないという状況で、エジプトでは当時、イギリスの植民地支配下の保護領であった

ので民衆の間にはイギリスの敵であるナチスに対する支援が広がっており、同時に宗派的な問題が各所で出てくるという映画でございます。

なぜ私がこの映画を授業で使うかといいますと、先ほど冒頭で申しましたように私はパレスチナ、イスラエルの問題をやっており、映画にユダヤ人が登場するからです。シャヒーンが登場させるさまざまな人物の織りなす、ある意味ではメロドラマはとてもおもしろく、そのストーリー展開では複雑な背景をもつ人物が登場しますが、そのなかで私に一番面白いと思われるのは、ムスリムの労働運動活動家とユダヤ教徒の富豪の娘が恋に落ち、不倫の愛のすえに子供ができてしまう、という実際にあった話かどうかは別にしまして、そのようなドラマティックな話を盛り込んでいる点です。今まさにナチスの軍隊がエジプトに押し寄せてきており、実際に占領したら、ユダヤ人の命の保証はなく、父のユダヤ人富豪はもうアレキサンドリアには住めないということで、長年住み慣れたエジプトを離れて、パレスチナではなく、南アフリカに行く決断をするという設定になっています。このあたりは、当時のムスリムとユダヤ教徒の関係、あるいはエジプトにおける階級、宗教、宗派の問題が微妙な形で描かれているということになります。

さらに映画の中には、イスラーム主義運動の老舗といわれるムスリム同胞団の指導者と思しき人物も登場してきます。外国人租界地としてのアレキサンドリアの様々な種類の人々が描かれている。エジプトの持っているコスモポリタンの性格が打ち出されているわけです。シャヒーンという人を考えるときに、先ほどから出ているアラブ・ナショナリズムというもの、アラブというもの、この人の出自、レバノン出身であるということが大きな要因であると考えていいのではないかと思います。

もう一点、中町さんのほうからイスラームについて学生の知識が不足しているという指摘で印象深かったことの関連です。私が授業で使ったときにある意味誤解を招いた一番面白い事例は、ミシェル・クレイフィという監督の作品です。この人はもともとイスラエル生まれのアラブ人であります。名前を見てもらえばわかりますように、キリスト教徒で、ベルギーというフランス語圏で教育を受けています。この監督の映画の中で1987年に公開された『ガリレアの婚礼』というものがございます。この映画をかつて九州の国立大学の教養部で教えていたときに教材として使って、実に見事に誤解してくれたのです。

映画はイスラエルの占領下にあるパレスチナの村で結婚式が行われるという設定です。父親は村のムフタール（長）で、その地方のイスラエル軍司令官から許可をもらわなければならない。司令官は自分が結婚式に出席できるのであれば許可するという条件をだす。占領者を招待するというふざけた話に強く反発する若者たちが結婚式のときに反乱を起こす計画を立てる。映画は結婚式のプロセスと反乱のプロセスが同時進行するわけです。そしてアラブ世界にかつて一般的な習慣として新婦の処女性を示すために結婚式の最後にシ

ーツを見せるというようなものがあります。映画ではそこまでは描かれていないのですが、本来的にはアラブ世界に残る女性の処女性（純潔）を守る問題と長男の許嫁を親が決めるという家父長制を問題にしている映画です。

学生にこの映画の背景を一切説明をしないで見せた場合、学生たちが、アラブ服を着た親父さんが出てきて、伝統的な結婚式の光景が描かれているのを見ると、ものの見事に、皆、これを、ああ、やっぱりイスラームというのはこういう古い伝統的習慣をもっているんだというふうになるわけです。つまり、古い伝統的なやり方をすぐにイスラームの結婚式と誤解するわけです。しかし、じつは映画ではイスラームの結婚式であることは一切示していないわけです。結婚式の式場でイスラエル軍の将校を呼んで一緒に飲食するわけですが、飲み物としてアラク（ブドウから製造した酒で水を加えると白濁する）が出てくるのです。つまり、ムスリムであるなら酒であるアラクを飲んでいるはずがない。

ということは、これはアラブのキリスト教徒の結婚式の風景というにも考えることができる。この映画から、アラブ社会のある種の共通した風俗、習俗、処女性の問題、純潔の問題が共有されているということが伝わらずに、このような問題はすべてイスラームの問題として解消されていってしまっているという点があります。つまり、映画に自分の持っているイスラーム・イメージを投影する形で映画を観て解釈している学生が多かった。イスラームに持っている私たちのイメージがそのまま映画に投影されて、じつは監督の意図としてはアラブ世界における家父長制、あるいは女性蔑視に対する批判があったわけですが、そのようなメッセージが、イスラームの後進性といえますか、女性抑圧に読み替えられていくという構図の中で受け止められていく典型的な事例であったと私は感じました。

問題としてあるのが、中東の宗教というとイスラームを思い浮かべ、もともとアラブ世界に伝わっている習俗としての習慣みたいなものが、キリスト教徒、イスラーム教徒の区別なく行われてきている伝統そのものが問題になっているにもかかわらず、宗教、とりわけイスラームの問題にしてしまう点を指摘できるのではないかと思います。もう一つの映画のテーマとしては触れられませんが、女子割礼の問題ともつながってきます。女子割礼を全部イスラームで説明していくという問題でもありうるわけです。イスラームが過剰なばかりに全ての説明の道具として使われてしまっているという悪しき例ではないかと思えます。つまりイスラームといえれば伝統をすべて説明できるという偏見です。

最後に中町さんのほうから9. 11以降の文脈で、最後の『サラディン』（※TVドラマ版）の中でパレスチナ問題とのからみ、あるいはテロの問題も出てきました。テロとのかかわりでパレスチナ映画の中で一番典型的なものとして、最近日本でも公開された『パラダイス・ナウ』という映画があります。この映画は自爆攻撃の決行までのプロセスが描かれており、イスラエルのバスに対する自爆攻撃を実行する2人のパレスチナ人の若者が

いかにしてテロ組織に入って、体に巻きつけた爆弾を抱えていかに攻撃するかという話を日常生活における心理劇として描いた映画です。

この映画を見ると一切イスラームが入っていません。つまり、テロ実行の説明の道具としてイスラームが一切入っていないわけです。もちろん死の前に祈りをいれております。しかし青年たちにはイスラームの名の下に自爆をするというようなことには一切触れられてはいないという点において、全てイスラームの宗教の文脈において説明していくというスタイル、よく西側といいますか欧米スタイルがありますけれども、パレスチナ自身、あるいはムスリム自身で説明するときには、宗教的な要素は少しもなく、むしろ政治の要素で語られるという点が重要です。この辺の認識のずれは非常に大きいのではないかというふうに思います。ということで時間ですので断片的なコメントになってしまいましたが、これで終わらせていただきたいと思います。

井上 どうもありがとうございました。この発表では監督の問題といたしますか、監督がどういう視点を持っているか、それからどのような背景の人なのかということの重要性の指摘があったと思います。これを知るのは難しい場合が多いのですが、イスラームのように日本人があまりよく知らない宗教に対して議論する場合には、これは考慮に入れないととんでもない思い違いをもあるというお話もあったと思います。あとで総合的に討議すれば大変面白い議題になると思います。

臼杵さんは、最近、岩波新書で『イスラエル』という本をお出しになりましたし、青土社からは『イスラームはなぜ敵となったのか』を刊行され、非常に精力的に本を出されていられます。お読みいただけると、今日の話もまた良くわかると思います。どうもお二人ともありがとうございました。